

北支の軍隊生活

秋田県 斎藤 勝三

私は大正十二（一九二三）年三月二十日、秋田県由利郡西目町田高の農業の長男として誕生、当時は、百姓の後継ぎ誕生ということで家族や親戚はもちろん、部落の皆様から祝福され、盛大な誕生日を催していただいたと聞いております。

家は田地約二町歩、畑地約四反歩、山林十一町歩の専業農家で、高等小学校、青年学校本科卒業後、研究科二年を終了して農業に従事しておりました。

入隊当時の家族は両親、弟四人、姉二人、妹一人の十人の大家族でしたが当時は普通でした。

私が入隊する前に長女は東京に出て看護婦、次男は徴用で横浜の工場に勤務しており、実際は八人家族でした。

私の故郷は羽後線西目駅より三キロの距離に位

置し、近くに町営の「かしわ温泉」が在って湯治客は絶えず、見渡す限り平坦な五百町歩に及ぶ田園が広がるのどかな寒村です。

昭和十八年七月、本荘市で徴兵検査を受け、検査官の前に不動の姿勢で立たされ、検査官から「甲種合格」と言われ、大声で「甲種合格」と復唱、大日本帝国の男子の本望を達した喜びに自然と嬉し涙が出ました。そして九月に「昭和十九年二月十五日秋田第十七連隊に入隊せよ」との令状が届きました。入隊前には心身共に鍛える努力と、国防婦人会、女子青年団員、親戚、部落の方々の手になる千人針の腹巻を作って頂きました。

いよいよ入隊の日が迫り、熊野神社に部落の方々が集合し、私の武運長久、無事凱旋の祈願祭を催して下さり、同時に集合した皆様の寄せ書きの日の丸を頂き、祝杯も挙げました。

翌日、部落の毎戸を回り、「必ず元気で帰ってきます。留守中家族をよろしくお願いいたします」と挨拶しました。

二月十四日、田高軍人分会長の齋藤金一郎さんの発起による入隊祝いを盛大に催して頂き、家族や部落の皆様にも別れの挨拶をした途端、あふれるように涙が出てきました。妹から「泣くな、泣くな」と背を叩かれ、励まされての出発でした。

入隊当日は、一寸先も見えないほどの猛吹雪で、当時は和服姿、特に女性ほとんど和服でしたので、モンペに藁の長靴で駅までの見送りでした。

普通四十分程度の道程を一時間以上かかり、駅に着くころには吹雪も止み青空が見えました。

駅前では私ら四人の到着を待っておられた西目村軍人会長齋藤陸軍中尉殿や国防婦人会会長などからの励ましのお言葉を頂き、四人を代表して私からお礼と銃後の守りをお願いし「私は勝三です(勝つぞ)。必ず勝つて帰ります」と誓いました。

数分後、見送りの方々と握手を交わして汽車に乗り、半身を窓から出し、寄せ書きの日の丸を振り、歓呼の声に送られ住み慣れた故郷を後にしました。座席に着いた我々四人は、共に感激の涙で

いっぱいでした。

当日は指定旅館に宿泊、翌十五日午前九時、秋田第十七連隊に入隊、雪第三五二四部隊要員として北部第十七部隊河瀬隊に編入され、直ちに軍服等衣類一式を受領し着替えました。

真新しい軍服に着替えた新兵一同は兵舎外に整列し、班長よりこれからの軍隊生活などについて説明あり、その厳しさに緊張しました。

兵舎での昼食、夕食は先輩が準備してくれ、夜の点呼後、慣れない寝台に潜り込みましたが、なかなか眠れない一夜を過ごしました。

二月二十日、石第三五九五部隊派遣のため秋田を出発するのに家族に連絡するよう指示があり、家に連絡しました。

二月十九日、小銃、帯剣、背囊、水筒、飯盒等の軍装品を受領。

二月二十日、父と姉が酒と小豆餅を持って面会に来てくれ、父と一杯の御神酒を頂き、お互いの健康を誓い合いました。

三十分ぐらい面会の後、内務班で軍装して整理、秋田駅に向いました。午後二時、秋田駅発の臨時軍用列車に乗車、再び父と姉にも会うことができ、また互いの幸せなどを祈り合いました。

二月二十三日 下関出港、同日釜山港に上陸

二月二十五日 鮮満国境(東安)通過

二月二十七日 北支山海関通過

二月二十九日 独立歩兵第二二八大隊教育隊に

編入

三月一日 独立歩兵第二十八部隊転属

三月二日 昔陽到着、近辺の警備、重機班に配

属

また、同日より二十四人の班員に対して初年兵教育が始まりました。教官は、教育隊長松田陸軍少尉、班長鎌田陸軍伍長、助手は山口上等兵と木村二等兵の二人でした。鎌田班長以下三人は九州出身でしたので言葉が通じないので苦労しました。

誰が作ったか、前文を思い出させませんが、教育や私的制裁に耐えるための、私たち秋田県出身の

初年兵が勝手な曲で歌った詩の一端を紹介します。

吹き捲る 砂塵囃みつつ 今日もまた

心一つに 秋田丈夫

教育期間中、八路軍の襲撃を受けて戦死した同年兵の森二等兵は、「天皇陛下万歳！」と大声で二回叫んで即死しました。彼は入隊前に結婚していると同郷の戦友から聞かされていたので、ご遺族の悲しみを思い、丁寧に火葬、遺骨の一部を保管して帰還後、ご遺族にお渡ししたと思います。

また、名前は思い出せませんが、小銃分隊の初年兵が軍隊生活の厳しさに耐えかねて兵舎の向い側の倉庫の中で、自分の小銃の銃口を喉に当て、足の親指で引き金を押しつけて自殺したと聞き、日本男子にもこんな者がいるとは、残念に思いました。同じ班の初年兵の話によれば、軍事訓練の厳しさより私的制裁に耐え切れず毎日悩んでいたらしく「お前だけ制裁を受けているわけではない、皆同じだ。我慢、我慢」だと元気付けていたのと残念がっていました。

何しろ毎日、日課のようにビンタが飛び、いろいろ公にしたくないような方法で、何にも悪いことをしていないのに制裁が行われ、先輩の言葉によればこれも申し送りとか言います。

私も何の理由もないのに重機の手入れが悪いとか何とか理由付けられ、重機の手入れで殴られ頭から出血したことがありました。殴った先輩が心配して同道されて医務室に向う途中、軍医からどうしたと聞かれたら、屋根から落ちてきた瓦で傷ついたと言えと言われ、その通り軍医に申告しますと、軍医も気付いたのか「これは瓦による傷じゃない」と、先輩を睨み、「今後このような殴り方止めろ」と怒鳴りつけていました。私もしゃくに障り、先輩を睨み付けました。

七月二十五日、一基の検閲無事終了。

八月十五日、一等兵に進級、星二つになった時の喜びで頭の傷のことも吹っ飛びました。

同日、私は思い出多い昔陽の街と戦友に別れを告げ、固第六四五九部隊に転属、野口隊に編入と

なりました。

八月二十七日、山西省太原到着。

同日、駐屯の北支派遣軍司令部、太原野口部隊第四中隊第一小隊第二分隊の重機班に編入されました。

この部隊は太原市城内から約六キロほど離れた所であり、内地並みの兵舎で、食器、寝具なども内地と同様の物で内地へ帰った気分になりました。ここへ来てからは私的制裁は全然無かったのですが下士官室の古参曹長、軍曹六人の洗濯、銃の手入れ、靴磨き、三食の食事の運搬、食後の片付け、部屋の掃除等には目の回る忙しい毎日でした。また衛兵所勤務もあり、歩哨の守則の暗記に苦労しました。歩哨を交替して衛兵所に戻ると、意地の悪い司令から質問を受け、間違はなく答えないと酷く叱られるので、便所内でも暗記するなど随分苦労しました。

私的制裁が無くなり安堵した矢先、今度は虱で苦労しました。入浴し下着の清潔にも注意してい

たのですが、何が原因か虱が出てきたのは不思議でした。

下着の縫い目の裏に並んだ数百匹の虱は指でしごととポロポロ落ちます。熱湯で煮沸しても翌日は同じくらい発生します。日中動いている間は痒みは感じませんが、夜床に就いて体を動かさなくなると虱の活動が始まり痒くて眠れない。無意識に爪で搔いた傷は絶えませんでした。

このころインゴ作戦に当部隊も出動することになり、私の分隊は本部警備の任に当たり出動しませんでした。重機第二分隊の十二人が出動し、三時間ほど経ったころB 29が飛来、襲撃の音が聞こえてきました。間も無く第二分隊が帰隊してきましたが、二人戦死、三人負傷の被害を受けていました。

以後一週間に二度の割合でB 29が低空で飛来、我々は兵舎の近辺に重機を設置して警備に当たりました。

十一月三日、固第一四九五部隊（第二野戦鉄道

特設運輸隊）誠部隊に派遣され、弾薬庫の警備に当たりました。位置は原隊から約八キロの所でした。

勤務は一個分隊十二人で、二十四時間に交替、九畳ぐらいの狭い分硝で、十二人は衣服や靴は着用したままの仮眠する生活でした。周囲四キロほどの巡回歩哨では、気温零下二〇度の夜には閉口しました。

また、勤務の都合で、ろくに入浴、洗濯もしないので、ここでも虱で苦労しました。

十二月八日、弾薬庫の勤務を他の分隊と交替して原隊に復帰、翌年三月二十日まで勤務しました。同年十二月一日付で「兵精勤章」を受けました。昭和二十年三月十四日、軍令陸甲第十八号により第七独立警備隊の編成が下令されました。

（第七独立警備隊は至武第一五六九四部隊と呼称され、独立警備歩兵第三十七大隊、同第四十二大隊の編成で、同第四十一大隊至武第一五六九九部隊の要員となる）

三月二十一日、独立警備歩兵第四十一大隊編成要員として太原を出発しました。

同日、望都到着、第四中隊編入。

三月三十一日、田中隊第一小隊第二分隊に配属されました。班長は安本安義。

五月一日、二回目の「兵精勤章」を受ける、同日陸軍上等兵に進級。保定周辺の警備並びに中国兵の討伐作戦に参加。

数日後、兵舎から八キロほどの地点で中国兵と遭遇、中国兵は突撃ラッパを吹奏して突撃して来ましたが、我が軍も負けずに進撃、我が軍の威勢に負け敵軍は後退しました。敵には被害を与えたいようでした。我が軍は全員無事でした。

八月十三日、八路軍討伐作戦のため早朝出発。露営しながらの三日間の強行軍でしたが敵軍とは遭遇せず、また駐留の気配もないので引き返しました。

兵舎に戻ったのは十七日早朝で、真夏の暑さのため衣服、頭髮は汗と砂塵でビショビショ、早速

入浴、着替え、洗濯などし、さっぱりして朝食をとり休んでいますと、週番上等兵の「直ちに全員屋外へ集合」の声がありました。何かと集合しました。

隊長が演壇に立って「これから断腸の思いで皆に伝える、我が日本帝国は無条件降伏した旨連絡が入った。このことはデマではない、恐れ多くも天皇陛下が玉音放送され、その録音が流されて来たら間違いない、皆も残念だろうが気を沈めて今後の指示に従うよう。以上」と悔やし涙を浮かべながら隊長室へ戻られました。

このことを聞いた隊員全員は、ただ呆然ぼうぜんとしてその場に座り込みました。無言の座り込みが十五分ぐらいたったころ週番士官が出て来て「これから内務班に行って兵器を除く私物（日の丸、千人針の胴巻、写真、手帳、メモ等一切）を持参するよう」との命令があり、早速、私物を持参し整理しますと、再度週番士官が出て来て「これから証拠隠滅を理由に持ってきた全私物を焼却処分する

から協力せよ。中には日本国の武運長久、諸君の無事帰還などを願うての国旗、胴巻、お守り等あるだろうが、上部からの命令であるから従うように」と士官自ら自分の私物に油を掛け、マッチで火を点け、これに習い次々と全員投げ込み焼却しました。

しかし私は軍隊手帳だけは焼かずに隠し持って復員、現在も大事に保管しております。

翌日より不安ながら当地域の警備に当たる。

九月二十八日、高陽出發。

九月二十九日、保定到着。当地域の警備に当たる。

十月四日、武装解除。

十月七日、十日、天津に集合の命令を受けており、道路調査のため週番である私を除いた当分隊員は午前三時出發、三十分ぐらい調査した地点で八路軍の襲撃を受け、四人の戦死者が出て現地に埋葬してご冥福を祈りました。

十月十三日、午前四時、保定出發。

十月十四日、天津到着。兵舎に落ち着く。我々の指揮系統は今までと変わらないが、あくまでも米軍の命令による行動で、同日より米軍の使役に就きました。

十月十五日、兵舎から四キロぐらい離れた米軍の兵舎まで、米軍の送迎用トラックに四十人ほどがすし詰めにされ、作業のため出向く。

作業は二十四時間交替制で、朝七時から翌日午前七時までの二交替制。

午前中は四十両ほどの戦車の水洗、油での清掃。午後からは兵舎内外の清掃。

夜間は天津港の輸送船からの荷物運搬作業でした。主な荷物は食料品、日用品で、六十キロから七十キロの重量物で体力のない者は大分こたえておりました。

作業は米軍の監視員の指揮のもとに行われましたが、無理な要求はなく親切でした。作業が終了すると感謝の意味でしょうか、笑顔で握手を求められます。

兵舎に戻ると、このような生活がいつまで続くだろう、いつになったら日本に帰してもらえらるろう、家族はどうしているだろうと全員異口同音に語り合う毎日でした。

昭和二十一年一月十日ころ、待ちに待った内地帰還のニュースを耳にし全員万歳三唱しました。

第一次帰還者発表。

一月十五日、天津出發、労苦を共にした戦友と涙を流して、お互いの幸せと健康を誓い、握手して見送りました。

我々はいつになるだろうと不安ながら待っていたところ、二月二日に残った者全員の帰還命令がでました。それで同日、天津出發。太古着と同時に米軍上陸船（一、二〇〇トン）に民間の引揚者と共に乗船、直ちに出港。

二月七日佐世保港に上陸しました。

懐かしい祖国日本の土を踏んだ途端、あふれるほどの涙が出て止まりませんでした。

復員局係員の案内で身体検査、防疫、復員手続

き、旅費、衣服、食料、食料配給券等を受領し、それぞれ故郷へ帰る準備を大忙しで行いました。

秋田県出身者四人は同一行動をとることにし、他はほとんど九州出身者のため、互いに健康、幸せを祈って佐世保駅で別れました。

秋田までの直通列車はなく上野駅で下車して戦禍で焼けた東京の姿を見て、新たに戦争の悲惨さを心にしました。

夕方になり、焼け跡に新築中の大工さんから木片をもらい、四人で佐世保で配給された米を飯盒炊飯で食べ、上野駅から汽車に乗りました。途中どのようにして西目駅に着いたか思いだせませんが、多分終列車だったのでしよう。

駅からは雪道、それに田舎の夜道ですから途中誰にも会うこと無く家に着きました。昔の田舎のことです。夕飯後の片付けが終われば、七時から八時ごろまでには床に着きます。我が家の中は真っ暗で音一つしない。多分皆眠っているだろうと思ひ、玄関の戸を叩きながら「勝三、ただいま帰

「って来たぞ」と大声で叫ぶと母が戸を開けて、薄暗い玄関でお互いに目が合うと、母も一言もなかった。ただ嬉し涙を流していました。

居間に入ると父、弟が起きて来て涙の再会でした。当時は電話がないので百メートルほど先の分家の叔父宅に母が報告に行くと、夫婦で濁酒一升を持って来てくれ、呑みながら夜が明けるまで話が尽きませんでした。

復員当時の家族は、両親と弟の三人で農業を専業としておりました。

私は農家の長男として後継ぎし、特に国を挙げたの食料増産が叫ばれている折でもあり、これに添うべく増産に励みました。

私は、昭和二十三年九月に結婚、一男一女を授かり、長男は現在広域消防組合職員、長男の妻は保母、孫二十三歳は県職員、孫二十一歳は大学四年生、それに妻七十七歳で家事、農業の六人家族の現在です。

復員後の職業は、農業を専業としながら。西目

村消防分団長、同町内納税委員、同畜産委員、由利酪農組合役員、田高部落清算委員、西目町農業委員、西目町和牛組合長、田高老人クラブ副会長等を勤めました。が現在若い方々に引き継いでおります。

最後に運悪く敵弾を受け戦死された多くの戦友の霊に心からご冥福をお祈り致します。

また、ご遺族の無念さ、悲しみを察し二度と戦争を起こさない、加わらない国であることを願う者です。